

リセット⑦

きさらぎ
如月ゆすら・作
いち い
市井あさ・絵



アルファポリスきずな文庫

オリバレス

ロウィーナに協力する
子爵。何やら怪しい
動きをしている……？

ロウィーナ

エアデルト王妃。
カインを王家から
追い出そうと
たくらむ。

カイン

公爵家に身を
寄せていた少年。
実はエアデルト
王国の第二王子
だと分かる。

ニール

ユリウスの
側近の侯爵。
カインを
かくまっている。

ユリウス

エアデルト王国の
王太子。何者かに
狙われて怪我を
負ってしまう。

リュシオン

クレセニア王国の
王太子。魔力が
強大すぎて
周りから恐れ
られている。

ルーナ

女子高生・千幸が
転生した姿。前世の
記憶と強大な魔力を
持ちつつ0歳から
人生やり直し中。

CHARACTER

登場人物

あらすじ

ふ う つ づ ま え む い じ ょ し こ う せ い ち ゆ き
不連続ながらも、前向きに生きてきた女子高生・千幸。

が ん ば ほ う び
頑張ったご褒美として、

か み さ ま い せ か い て ん せ い
神様が異世界に転生させてくれることになりました！



て ん せ い さ き け ん ま ほ う せ か い
転生先は剣と魔法の世界・サントロイメ。

と な り く に
お隣の国エアデルトで

さ が
カインを探していたら、

たい へ ん じ け ん ま こ
大変な事件に巻き込まれちゃった！

は ん に ん
しかもカインが犯人だなんて……

う そ
そんなの嘘だよ？



もくじ

第四章 だいよんしやう	第三章 だいさんしやう	第二章 だいにしやう	第一章 だいいっしやう
日と月の神殿 ひ つ き し ん で ん	後悔は胸に苦く こうかい むね に が	己のなすべきことを おのれ	神々のもたらせし果実 かみ が み
……	……	……	……
138	100	52	6

CONTENTS

第一章 神々のもたらせし果実

信じるもののため、険しき道に踏み出す勇気がありますか？

——赤。

絨毯に染み込んだ鮮血は、そこに倒れピクリとも動かない人間から止めどなく溢れているもの。

そのうち三人の男はすでに絶命しているのか、虚ろな瞳は瞬きに閉じることもない。

「殿下！」

追跡をもう一人に任せ、王太子の部屋に残っていた護衛兵士が、叫びながら部屋の主と思われる青年に駆け寄った。目を閉じ、身動きもしない青年——王太子ユリウスの手を取った彼は、次の瞬間、悲痛の表情を驚きに変える。

「生きてらっしゃる！ 殿下、お気を確かに！」

この異様な状況に呆然としていたルーナやリュシオンたちも、兵士の言葉に我に返った。すぐさま王太子に駆け寄ったルーナは、血で汚れた絨毯の上に躊躇うことなく膝をつく。

「何を……!?」

彼女が血の氣を失った王太子の身体に手を翳すと、兵士は戸惑いつつも鋭い調子で止めに入った。ルーナが逃げた賊——カインの名を呼んだため、警戒心を抱いているらしい。しかし彼女はその制止に対し、強い口調で言い放つ。

「何って治療です！ 早くしないと手遅れになっちゃう！」

「しかし……」

ルーナは躊躇う兵士に構わず、すぐさま「治療」の魔法語を唱えた。それと同時に彼女の手が淡く光り、そのあたたく柔らかな光は王太子の傷へと吸い込まれていく。

「これは……」

兵士は目の前の光景に驚きの声を漏らした。王太子の身体から噴き出していた血が止まり、目を背けたくなるような酷い傷口が見る間に塞がっていくのだから無理もない。

「ルーナはまだ幼いが、白魔法の腕は確か。安心して任せて大丈夫だ」

後ろからかけられた隣国の王太子の声に、兵士は無言でうなずく。少なくともルーナが



王太子を助けるために必死なのは疑いようもないのだ。

彼女に対する警戒が完全に解かれたわけではないが、治療をやめさせるのは、王太子の
かろうじて繋がっている命の糸を切り捨てる行為だとわかったのだろう。

兵士は静かに立ち上がると、自身を落ち着かせるように大きく深呼吸し、改めて周りの
様子に目をやった。

血を流して倒れているのは王太子を除いて三人。赤地に金の縁取りが施された制服を着
ているため、王族の警護を務める近衛兵士だとわかる。

彼は斃れている近衛兵に近づくと、開いたままの目をそっと閉じてやった。そして残り
の二人の死も確認すると、ドアの方を振り返る。そこには青さめながらも成り行きを見
守っている家令の姿があった。

「家令殿、宰相閣下に急ぎ報せを！」

「は、はい！ かしこまりました」

護衛兵士の言葉で、家令はすぐさま踵を返すと足音を響かせて駆け出して行く。

一方、必死に魔法治療を続けるルーナへ、リュシオンと共に治療を見守っていたジーン
が声をかけた。

「ルーナ、どう？」

心配しんぱいそうな兄あにの問いかけに、ルーナは眉間みけんに皺しわを寄よせる。

「傷きずは癒いやすことができたの。でも、失うしなった血ちが多おほすぎる……」

言い終おえたルーナはぎゅっと唇くちべを噛かみしめ、目を閉とじたままの王太子おうたいしを見みつめた。彼女かのの治癒ちゆのおかげか、先ほどもで苦悶くもんの表情ひようじようを浮うかべていた彼かれが、今は安やすらかに目めを閉とじている。

「危険きけんな、状態じようたい……なのですか……？」

おずおずと口くちを出だす兵士へいしに、ルーナは一瞬いつしゆん苦くるしげに顔かおを歪ゆがめた後あと、こつくりとうなずいて顔かおを伏ふせた。

「……とりあえず、王太子おうたいし殿下でんかには別室べつしつへ移動いどうしていただきましょう。ここでは落おち着ついて治療ちりようもできません」

重苦おもくるしい空くう気を破やぶるかのように、ジーンが提案ていあんする。護衛ごゑい兵士へいしはそれに同どう意いすると、王太子おうたいしの身体からだを慎重しんちょうに抱あき上げた。

「ルーナ。君きみは彼かれについて行いって、王太子おうたいし殿下でんかの治療ちりようを継けい続ぞくするように」

「そうだな。とりあえず医師いしか白魔法しろまほう使いが来るまで、できる限かぎりのことをしてくれ」

ジーンとリュシオンにそう言いわれてうなずいたルーナは、王太子おうたいしを抱かかえた兵士へいしに付つき添そって部屋へやを出でて行く。

その場に残のこされたリュシオンは、部屋へやの惨状さんじように改あらためて目めをやると大きなため息いきをついた。「ルーナが〈治癒ちゆ〉に専念せんねんしてくれていて助たすかったな……その前はシヨック状態じようたいだったし、さほど部屋へやの状況じようきようなど目めに入はいっていなかっただろう」

「ええ。こんなものをまともに目めにしたら、きつとあの子この心こゝろの傷きずになります」

血ちと屍しかばね。できればルーナには一瞬いつしゆんたりとも見みせたくない光景こうけいだ。

リュシオンは顔かおを顰しかめて室内しつないを見みやるジーンの肩かたに手てを置おく。

「ジーン、俺おれはルーナの方ほうに行く。おまえはそろそろ駆かけつけてくる兵士へいしの対たい応おうを頼たのむ」

「わかりました」

軽かるく一札いちしするジーンにうなずくと、リュシオンは難むじかしい顔かおのまま惨劇さんげきの部屋へやを後あとにした。

護衛ごゑいの兵士へいしによつて近ちかくの客間きやくまへと運はこばれた王太子おうたいしは、すぐさま寢台しんだいに横よこたえられた。

斬られたせいでぎつくりと破れた衣服は、血に染まり無残な様相を呈している。しかしそれとは裏腹に、そこから見える王太子の身体には醜い傷口などついておらず、うつすらと肌が赤くなっているだけだった。

「魔法の力というのは、すごいな……」

寝台の横で王太子に治癒魔法を施し続けるルーナを見て、兵士は思わずといった様子で口にした。

サンクトロイメという世界には魔力を持つ人間が多く存在するが、魔法使いになれるほどの魔力を持つ人間は少ない。

そんな中、ルーナやリュシオンが生まれたクレセニア王国は、古くから才ある魔法使いを重用して身分を与えてきた。さらにそういった家の者同士が婚姻を重ねた結果、貴族階級に優秀な魔法使いが多く現れることとなった。

そのような特殊な国を除き、多くの国では高位の魔法使いは王家で抱えているほんの数人というのが普通だ。

しかも市井の魔法使いには、中位どころか、魔法使いと名乗るなどおこがましい者も多く、人々が頼るのはもっぱら特定の魔法効果を付加した魔道具の方なのだ。そのため彼ら

は魔法の便利さを認識しつつも、あてにすることはない。

エアデルトでも状況は同じであり、王宮に仕える兵士といえども高位の魔法治療を目にしたのは初めてだったのだ。

「確かに傷は癒やすことができました。でも……」

「あの大量の出血が問題……なんですネ」

ルーナの言葉を引き継ぐように言った護衛兵士に、彼女は無言で小さくうなずく。傷がなくなっただけとはいえ、王太子の顔は青白く、その呼吸は弱い。安心できる状況ではないのは一目瞭然だった。

医師や薬剤師が施す治療と、魔法治療との大きな違いのひとつに、その即効性が挙げられる。

例えば治療をするのが医師の場合、酷い傷を負った患者には、傷口の縫合などの処置が施される。その後経過を診つつ治療を続けることになるが、結局のところ傷を治すのは人が本来持つ自然治癒力であり、時間だ。

しかし魔法治療は違う。術者の魔力でもって思うがままに身体に干渉し、止血をしたり傷口を塞いだり、さらには治癒力を高めて文字通りその場で傷や病を癒やしてしまうのだ。

そのため本来必要な、傷を治すための時間は短縮されることになる。

けれど万能に思われる魔法治療であっても、失ったものを取り戻すことは不可能だ。ゆえに出血多量になれば手遅れになる場合もあるし、その他にも手の施しようのないほど進行した病気の治癒や、なくした手足、壊死した患部などの復元も不可能なのだ。

ルーナは複雑な表情の護衛兵士にそれ以上何も言えず、持っていたハンカチで血で汚れた王太子の顔を拭いた。

そんな中、唐突に部屋のアが開く。ルーナと兵士がハッと目を向けると、そこには厳しい表情のリュシオンが立っていた。

「彼の様子はどうか？」

「傷は癒やせたよ……」

自分の質問に口ごもるルーナを見て、リュシオンは小さく嘆息する。

「やはり血を流しすぎたせいかな。せめて意識が戻るといいが」

「うん……。どうにかして気づいてくれれば……」

寝台の横で、心配そうに青白い王太子の顔を見下ろすルーナに近づき、リュシオンは慰めるように彼女の頭に手を置いた。

ルーナはその気遣いに慰められつつも、胸中で悲痛な思いを巡らす。

（どうしてこんなことになったんだろう……。これはカインがやったこと？ ううん、違

うよね。カインはこんな酷いことするような人じゃないもん。でも、もしかして彼にはこ

うする正当な理由があったとか？ わからない、わからないよカイン……）

考え込むルーナの耳に、ふと大人数の慌ただしい足音が届く。だんだんと大きくなるそ

れに不安を覚え、彼女は隣に立つリュシオンへと目を向けた。

「家令の報せが届いたようだな」

彼がそうつぶやいたと同時に、大きな音を立てて部屋のアが開けられた。

最初に室内に駆け込んだきたのは、エアデルト王国の宰相であるニール侯爵。そのすぐ

後に、護衛と思われる数人の兵士がなだれ込んできた。

「ユリウス殿下！」

ニール侯爵は寝台に横たわる王太子に気づくと、その名を叫んで駆け寄った。

「何故このようなことに……」

寝台の端に手を置き、苦しげに項垂れるニール侯爵のつぶやきに、王太子を部屋に運んだ護衛兵士が口を開く。

「不審な物音を聞いて我々が駆け込んだ時には、すでに王太子殿下は血塗れで床に倒れておりました。護衛していたはずの近衛兵も同じように倒れており、その場には賊と思われる十代後半、いや、半ばと思われる少年が血塗れの剣を持って立っておりまして」

「少年!？」

聞き返す侯爵にうなずき、兵士はさらに続ける。

「はい。成人もしていないような年頃の少年です。我々に気づくとテラスから庭へと逃走しましたので、一緒にいた仲間が後を追いましたが……」

そこまで言ったところで、開いたままのドアからジーンと共に、カインを追って飛び出した件の兵士が現れた。

「申し訳ございません。賊を取り逃がしました」

兵士たちの口から出る『賊』という単語に、ルーナはギュッとドレスの胸元を掴んで唇を噛む。

（このままじゃ、カインは王太子様を襲った賊にされてしまう。でも、あの状況を説明できる人は誰もいないし……）

リュシオンを交えてニール侯爵に状況説明を続ける兵士たちを横目に、ルーナは途方

に暮れながら目を閉じたままの王太子をぼんやりと見つめていた。

王太子に助かってほしいという思いに偽りはない。でもその中には、真実を語れるのは彼しかないから、という思惑もあるのだ。そんな考えを持ったことに自己嫌悪を感じつつ、それでもルーナは彼の回復を祈る。

『……ルーナ』

不意に聞こえてきた『声』に目を向けたルーナは、そちらを見て小さく微笑む。他の誰にも見えなくとも、彼女の目にはしっかりと四、五歳ほどの愛らしい幼女の姿が映っていた。

「風姫さん」

ルーナがその名を口にする、と、風姫はホッとしたように顔を綻ばせる。彼女はルーナの手を両手で握り、慰めるように撫でさすった。

その仕草に「ありがとうね」とルーナがつぶやくと、風姫はうなずいて彼女の手に頬を寄せる。

『この者の生気はあまりにも薄い。このままでは目を覚ますかどうか……』

風姫の言葉を聞き、ルーナは思わず顔を歪めた。

精霊は嘘をつかない。彼女の言葉はルーナに残酷な現実を突きつけるものだった。

「できるだけのことはしたけど……でも、それじゃ足りないの」

苦しげなルーナの声に、風姫はふうっと息を吐いて口を開いた。

『ルーナ、神木の実を知っておるか?』

「神木の実?」

風姫の口から出た聞き慣れない単語を、

ルーナは無意識に繰り返す。

『そうだ。昔聞いたことがある。神域にて守られる神木になる実。その実を聖なる水に浸せば、どんな病や怪我をも癒やし——消えゆく命さえ引き戻す妙薬となるという』

「そんなものがあるの!？」

ルーナは思わず叫び、それから慌てて口に手をやって周りの様子を窺った。しかし彼女の心配を余所に、室内にいる者たちに気づいた様子はなかった。彼女は風姫がその力で自分たちの会話を周知から隠していることを思い出し、ホッと息をつく。

『うむ。妾たち風の性を持つものは、ありとあらゆる場所に存在する。それゆえにかの実

についても聞いたことがあるのだ』

「場所はあるの?」

おずおずと尋ねるルーナに、風姫は深くうなずいてみせる。

『正確な位置となると近づかねばわからぬが、神域があるという場所はわかるぞ。ジャスディール山脈の北にある霊峰ロズワルドだ』

「霊峰、ロズワルド……」

『そうだ。妾はなんでも知っておるであろう?』

ルーナがロズワルドの名を口にすると、風姫は何かを期待するようにコクコクとうなずきルーナを見上げた。

「す、すごいね」

あまりにもあからさまな「褒めて」の眼差しに、ルーナは顔を引き攣らせつつも風姫の頭を撫でてやる。

『ふふふ、妾にはそのようなことどうでも良い。だから普段は気にもせぬのだが、ルーナが知りたいとなれば話は別だ』

ふふんつと胸を反らす風姫に、ルーナは苦笑するしかない。



「こんなすごい話はどうでもいいんだ……。あ、でも精霊に病氣つてなさそうだし、そう考えると神木の実（アンブロッサ）は彼らにとつてまったく無用のものつてことなのかな」

何はともあれ風姫（ふうき）からもらった情報（じょうほう）は、ルーナの胸（むね）に希望（きぼう）の灯（ひ）を点（つ）けた。

「わたし、それを宰相様（さいしやうさま）たちに教えてくる！」

勢（いきお）い込んで言（い）ったルーナは、リュシオンやジーンを交（まじ）えて話（わ）し合（あ）いを続（つづ）けているニール侯爵（こうしやく）へ近づ（き）く。侯爵（こうしやく）は傍（そば）にやつてきた彼女（かのじよ）を不思議（ふしぎ）そうに見（み）ながらも微笑（ほほえ）んだ。

「どうかしたのかな、お嬢（じやう）さん」

話を聞（き）こうと屈（かが）んでくれた侯爵（こうしやく）と目線（めせん）を合（あ）わせ、ルーナは口（くち）を開（ひら）く。

「お話（はなし）があります、宰相様（さいしやうさま）」

「話（はなし）？」

ますます不思議（ふしぎ）そうに尋（たず）ねるニール侯爵（こうしやく）に、ルーナは静（しず）かに「はい」とうなずいた。

「王太子（おうたし）殿下（か）の傷（きず）は癒（い）やすことができました。けれど失（うしな）った血（ち）は戻（もど）つてこず、このままではいつ容態（ようたい）が急変（きゅうへん）するかわかりません」

「うむ」と相槌（あいづち）を打（う）つ侯爵（こうしやく）へ、ルーナはさらに言葉（ことば）を続（つづ）ける。

「でも、あるものさえ手（て）に入（はい）れば、王太子（おうたし）殿下（か）を救（す）うことができると思（おも）うのです」

「あるもの……？」

とりあえず聞（き）いておこうといった様子（ようす）だった侯爵（こうしやく）は、ルーナと言（こと）葉（ば）を繰（く）り返（かえ）すと鋭（すまじ）い眼（まな）差（さ）しを彼女（かのじよ）に向（む）けた。しかし彼女（かのじよ）は怯（ひる）むことなくそれを受け止（と）め、真剣（しんけん）な表情（へいし）でうなづく。「はい。『神木（アンブロッサ）の実（み）』という神域（しんいき）の木（き）になる実（み）です。それには怪我（けが）や病（い）を癒（い）やすだけでなく、どんなに弱（よわ）った身体（からだ）でも回復（かいふ）させる力（ちから）があるのです」

ルーナが一気（いっき）に言（い）い終（お）えると、周（まわ）りの兵士（へいし）たちも「おお」と声（こゑ）をあげる。

王太子（おうたし）の容態（ようたい）が予断（よだん）を許（ゆる）さないものであることは、普段（ふだん）怪我（けが）を見慣（みな）れている軍人（ぐんじん）であれば察（さつ）することができ（さ）る。それゆえ皆（みな）、顔（かお）には出（だ）さないものの悲痛（ひつう）な思（おも）いでいつぱいだったのだ。だが、彼女（かのじよ）の言葉（ことば）は彼（かれ）らに希望（きぼう）を与（あた）えてくれた。

「そんな話（はなし）は聞（き）いたことがないが、本当（ほんとう）なのか？」

期待（きたい）を隠（かく）さない兵士（へいし）たちを横目（よこめ）に、ニール侯爵（こうしやく）はまるで狙（ねら）いを定（さだ）めるように片目（かため）を細（ほそ）めてルーナを見（み）つめる。

「本当（ほんとう）です。どうか信（しん）じて下さい！」

胸（むね）の前（まえ）で両手（りやうて）を組み真剣（しんけん）な表情（へいし）で訴（う）えるルーナを前（まえ）に、侯爵（こうしやく）は思案（しあん）するように顎（あご）に手（て）をやった。

（殿下を救う手立てがあるのならば飛びつきたいのは私も同じ。しかし『神木の実』などという秘薬は聞いたことがない……）

縫りたいと思いつつも、そんな怪しげな話を頭から信じることができず、ニール侯爵は眉間の皺を深くする。そんな彼へ、今まで黙っていたリュシオンが声をかけた。

「ニール侯爵、彼女の言うことは本当だ。エアデルトでは馴染みのない話かもしれないが、我がクレセニアではよく知られている。……そうだな、ジーン」

ジーンは唐突に話を振られたにもかかわらず、落ち着いた様子で「はい」と神妙にうなずいた。

クレセニアの王太子と公爵令息が断言したことで信憑性は一気に高まり、その場にいる者たちは喜色を濃くする。

そんな中、一人だけ驚きに固まっていたのは、他でもないルーナ自身だった。

（リュウも兄様も、神木の実なんて知らないよね？ だって今、風姫さんが教えてくれたばかりの話だもん。つてことは、皆を信じさせるために咄嗟に言ってくれたのかな……）

ルーナは二人のフオローに感謝しつつ、ニール侯爵へもう一度強く訴えかけた。

「どうかお願いします。なんだつたらわたしが神木の実を探しに行きますす！」

「おいつ！」

「ルーナ!?」

飛び出したルーナの言葉に、リュシオンとジーンは思わず声を張りあげる。

「駄目に決まってるだろう。おまえがそこまでする必要がどこにある！」

「そうだよ。探しに行くって簡単に言うけれど、神域というからには人の寄りつかない場所だろう？ 街道を外れただけで盗賊や魔物の数も多くなるんだ。そんな旅にルーナが行って行っても足手まといにしかないよ」

二人の正論に口を噤む彼女に、侯爵はふつと口元を緩めるとその頭に手を置いた。

「貴女の気持ちはわかりました。秘薬の話、前向きに検討いたしましょう。ですが貴女自ら赴く必要はございませんよ。エアデルトにも優秀な者はおりますので」

ルーナの気持ちを和らげるためか、ニール侯爵が片目を閉じてそう言った。頭から否定されなかったことにホッと、彼女も素直にうなずく。

侯爵がそんな彼女の頭を再度撫でたところで、一際大きなざわめきが聞こえてきた。

「どうやら、王妃陛下がお出でのようにですな」

侯爵のつぶやき通り、それからすぐに護衛の近衛兵士のみならず、文官まで引き連れた

エアデルト王妃ロウィーナが現れた。

「ああ、ユリウス。どうしてこんなことに……」

王太子重篤の報に駆けつけた王妃は、そう嘆きの声をあげながら寝台へ駆け寄る。そして息子の青白い顔を見つめ、その冷たい手を両手で包み込むとキツと鋭い眼差しを室内に向けた。

「一体誰がユリウスを！」

感情のままに叫んだ王妃は、そこで初めて隣国の王太子に気づいた。

「リュシオン殿下……？」

彼女は訝しげにつぶやいた後、次にその場にそぐわない幼い少女——ルーナに目をやり、不快さを隠すことなく細い眉を吊り上げる。苛立ちのまま口を開こうとする王妃に気づいたのか、ニール侯爵が先手を打つように話し始めた。

「王妃陛下、こちらのリュシオン殿下とお連れの方々がユリウス殿下をお救い下さったのです。リュシオン殿下、我が国の王太子殿下を救っていただきましたこと、誠に感謝の言葉もございません」

丁寧に頭を下げたニール侯爵は、王妃が口を噤んだのを確認し、さらに続ける。

「ですが……これ以降は私どもの領域。ご無礼は重々承知しておりますが、どうか速やかにお引き取り下さるようお願い申し上げます」

彼は丁寧に、だがきつぱりと、これ以上の干渉は無用とリュシオンに示してみせた。

「わかっている。我らはこれにて退出させてもらおう」

侯爵の言う通り無礼とも取れる言葉だったが、リュシオンは気にすることなくそう返す。そして口を出すきつかけを失っていた王妃の前に立った。

「王妃陛下。このような状況ゆえ、どうか不作法をお許し下さい」

彼は優雅な所作で腰を折ると、差し出された手の甲に作法通り唇を近づける。

隣国の王太子が非の打ち所のない立ち居振る舞いで礼を尽くしたことにより、王妃の陰しい感情も少なからず収まったようだ。

「わかつております。リュシオン殿下にはこちらこそ正式に礼を述べねばならぬところですわ」

そう返す王妃に、リュシオンは輝くような笑顔を見せて首を横に振った。

一方ルーナはそんな彼を見上げながら、常では絶対にありえない愛想の良さに啞然としていた。



(……誰? ちょよ、これ誰!?)

思わず心の中で叫んだルーナだったが、
リュシオンはにつこりと微笑んだまま彼女の
肩をそつと押す。

「それでは我々はこれで失礼させていただきます」

「かしこまりました。君たち、殿下方をお送りしない」

ニール侯爵は退出しようとするリュシオン
へ頭を下げ、後ろに控える護衛兵士へ声をかけた。

リュシオンはルーナとジーン、そして数人の
護衛を伴って部屋を出ると、その瞬間、先
ほどまで貼り付けていた満面の笑みを消した。
「リュー……顔、戻ってるよ」

皮肉げな半目のルーナが小声で指摘すれば、リュシオンは先ほどまでのやり取りを思い出したのか不機嫌な顔で彼女を見下ろす。

「いつまでも愛想笑いを振りまけるか」

「でも振りまいた甲斐はありませんよ」

ジーンは身もふたもない友人の言葉にクスクスと笑って言った。二人のやり取りを聞き、ルーナはやつとリュシオンの機転に気づく。

「ひよつとして、わたしのため?」

ポツリとつぶやいた彼女に、凶星を指されたリュシオンは苦く顔を顰めた。

王太子が賊に襲われて重体などという事態は、いくら友好国とはいえ知られたくない事実のはず。下手をすればそれを隠すため、エアデルト側から口を封じられることも考えられるのだ。

リュシオンとジーンはその身分によって守られている。けれどルーナは、高名なレングランド学院長とはいえ、貴族としては下位に当たる男爵の娘ということになっていた。その程度の身分であれば国として排除を躊躇うことはないだろう。だからこそリュシオンは、ルーナから王妃の関心を逸らすべく、あのような行動に出たのだ。

「リユー、ありがと」

小さく礼を述べるルーナの頭^{めづま}に手^てを置くと、リュシオンはいささか乱暴^{らんぼう}にかき混ぜる。そして髪^{かみ}を乱^{みだ}され「もう」と口^{くち}を尖^{とが}らせるルーナを見^み下ろしながら、彼は王妃^{おうひ}から彼女^{かのじよ}を庇^{かば}うように口^{くち}を挟^{はさ}んだ侯爵^{こうしやく}のことを思い出^だした。

（あれだけで王妃^{おうひ}が誤魔化^{ごまか}されてくれるとは思^{おも}えないが、少なくとも宰相^{さいしやく}の方^{ほう}はルーナをどうこうしようとは思^{おも}っていないようだ。なにせよルーナが巻^まき込まれる事態^{じたい}にならないと良い……いや、違うな。ルーナが自ら首^{くび}を突^つ込んでいかないといいんだが、だ）
自分^{じぶん}を見てため息^{いき}を零^{こぼ}すリュシオンに、ルーナは首^{くび}を傾^{かし}げつつもムツとするのだった。

†

城内^{じやうない}にある客室^{きやくしつ}に戻^{もど}ると、リュシオンは護衛^{ごゑい}としてついでにきた兵士^{へいし}に目^めを向^むけた。

「こいつに少し話^{はなし}がある。また呼^よぶから、しばらく下^さがつていてくれ」

そう言^いいつけて、彼はルーナの手^てを取り室内^{しつない}に足^{あし}を踏^ふみ入^いれる。ジーンもその後^{あと}に続^{つづ}ぎ、後ろ^{うしろ}の手^てにドアを閉^しめた。

ルーナはリュシオンに手^てを引^ひかれ、窓際^{まどぎわ}に設^{しつら}えられたテーブルセットへと誘導^{ゆうどう}される。

そこにはオーク材^{ぎい}でできた猫足^{ねあし}のテーブルを中^{ちゆう}心に、四脚^{よあし}の椅子^{いす}が置^おかれていた。

リュシオンはさつさと椅子^{いす}の一^{ひと}つに腰^{こし}を下^おろすと、立ち尽^たくすルーナにも斜^{なな}め横^{よこ}にある椅子^{いす}へ座^{すわ}るよう促^{うなが}す。おずおずと彼女^{かのじよ}が従^{したが}うのを確^{かく}認^{にん}したジーンは、盗聴^{とうちやう}などを防^ふぐ〈結^{けつ}界^{かい}〉を張^はった。

「さて、色々説明^{いろいろせつめい}してもらおうか？」

リュシオンは、ジーンが自分^{じぶん}の対面^{たいめん}にある椅子^{いす}に腰^{こし}を下^おろしたところで口火^{くちび}を切^きる。

「色々^{いろいろ}つて……」

困惑^{こんわく}したようにルーナがつぶやくと、ジーンはクスリと笑^{わら}って助け船^{たすけふね}を出^だした。

「まずは『神木^{アンブロシア}の実^み』のことからかな」

二人^{ふたり}の真剣^{しんけん}な眼差^{まんざ}しに焦^{あせ}りながら、ルーナはどう説明^{せつめい}するべきか俯^{うつむ}いて考^{かんが}え込^こむ。するとそんな彼女^{かのじよ}を助^{たす}けるように、唐突^{たうとつ}に風姫^{ふうき}が現^{あらわ}れた。

彼女はルーナの膝^{ひざ}に凭^{もた}れかかるようにして抱^あきつくと、悪戯^{いたずら}っぽく笑^{わら}って提案^{ていあん}する。

『妾^{わらわ}からと言^いわずに、しいれぐからと言^いっておけば良いのではないか？ こやつらはアレらの本性^{ほんしやう}を知^しっておるのだから納得^{なつとく}するであらう』

「うむ、この場合はそれが一番良いだろう」

「たまには風の者も良い提案をする」

シリウスとレグルスも同意を示すが、なにぶん一言余計だ。すぐに風姫がキツと目を吊り上げる。

『たまにはとは何じや！ 妾を愚弄する気か！』

「ふつ、本当のことであろう？」

「うむ、間違いないな」

テールの下で「まあまあ」とそれぞれ手を添えて睨み合う守護者たちを宥めた後、ルーナは風姫の提案に乗って話し出した。

「あのね、いちちゃんとれぐちゃんから聞いたことがあるの」

ルーナの言葉に、リュシオンとジーンは無言のままうなずき、先を促す。

「ジャスディール山脈の北にある、霊峰ロズワルドには神域と呼ばれる場所があつて、そこには神世の時代からある聖なる木——神木があるんだって。神域の正確な場所は近づかないとわからないみたいなんだけど……」

「神域か……」

ルーナの説明に、リュシオンが小さくつぶやいた。そして二人の反応を心配げに見ている彼女へ、ジーンは安心させるように微笑む。

「神獣の言ともなれば、十分に信頼できる話だよ。ただ、エアデルトの人たちは彼らの正体を知らないわけだし、それを説明せずに納得させるというのは難しいだろうね」

「そうだな。さっきは咄嗟にクレセニアに伝わる話だと説明したが、良い判断だったかもな」

ジーンの言葉を受け、リュシオンは苦笑しつつそう返した。

（そうだよ。ていうか、よく咄嗟にフォローしてくれたよね。それってわたしの言葉を無条件に信用してくれてるってことだし）

「あの、リユー」

「なんだ？」

ルーナは遠慮がちにリュシオンを呼ぶと、ペコリと頭を下げる。

説明を受けたわけではないのに、自分の言葉を信用し、さらに他の人間を納得させるためにフォローしてくれたリュシオン。ルーナは改めて彼の思いやりに深く感謝すると同時に、胸があたりかくなるのを感じた。

「今さらだけど、さつきはありがとう。リユーや兄様がそう言ってくれなかったら、ニール侯爵も絶対信用してくれなかったと思う」

「いくらおまえでも、根拠もなくあんな話はしないからな」

「そうですね。それに与太話と聞こえるような話も、ルーナが口にしたら本当かもしれないと思ってしまうからな」

リュシオンとジーンの、褒めているのか貶しているのかわからない言葉に、ルーナはガクツと肩を落とす。すると彼女の膝がトントンと叩かれた。

（風姫さん？）

ルーナが風姫へ目をやると、彼女は親指をグツと突き出して満面の笑みを見せる。

『さすがはルーナだ！ 完璧に信用されておるではないか！』

リュシオンたちの言葉をなんの疑いもなく褒め言葉と取った風姫は、キラキラと輝く目をルーナに向けてきた。

（……うん、ここは風姫さんの言うように良い方向に取っておこう）

ルーナは「ありがとう」と感謝を込め、テーブルを目隠しにして風姫の頭を撫でてやる。少しの間ルーナの膝に頬をのせて甘える風姫に和んだ後、彼女は顔を上げてリュシオン

を見た。すると先ほどとは一変して難しい顔になっている彼が目映る。

「リユー？」

ルーナが心配そうに声をかけると、リュシオンは眉間に皺を寄せたまま口を開いた。

「いや、その話が元でややこしいことにならなければいい、とな……」

「ええ。先ほど侯爵がおっしゃったように、自国のことだからと自分たちで対処してくれば問題はないのです……」

ジーンはリュシオンの言葉にうなずきながら、表情を曇らせる。

「まあとにかく、神木の实については、先ほどの通り押し通すぞ」

「わかりました。こうなつては今さらルーナの身分を明かしても不信任を煽るだけですし、隠し通した方がよさそうですね。でもそうなると、リュシオンや私に比べてルーナは後ろ盾が弱い分、危険ですが」

困ったとばかりに眉尻を下げるジーンにうなずいた後、リュシオンはルーナとしつかり視線を合わせて言った。

「マティス卿には話しておくが、これからは俺やジーンと常に一緒にいる方がいいだろう」

「うん……」

困惑しつづかなしくルーナに、今度はジーンが声をかける。

「いいかい、ルーナ。しばらくは大人しくしているんだよ？」

「はい、兄様」

ジーンは神妙にうなづくルーナを、それでも心配そうに見つめていた。

このような重大事でなければ、本当の身分を明かしても良かったかもしれない。しかし今の状況では、王太子を害するという目的があったから身分詐称をしたと思われるかねないのだ。そうなれば、たとえ公爵令嬢であっても追及は免れないし、下手をすれば外交問題に発展してしまう。



「大人しくしてるし、きつとこんな子供のことなんて誰も気にしないと思うよ」

安心させるようにルーナが言うと、ジーンは「そうだね」と優しく笑う。

「本当にそうだといんだがな……」

兄妹のやり取りを見ながら、リュシオンは祈るように小さく独りごちた。

+

ルーナたちが退出してすぐ、王太子が眠る部屋に侍医と白魔法使いが駆けつけた。診察のために寝台の上掛けをめくった彼らは、その有様に息を呑む。

「これは……」

斬りつけられたと思われる衣服の破損部分の大きさと、染みついたそのおびたらしい血の量に、侍医は思わず声をあげ、白魔法使いも顔色を変えた。

侍医はその動揺を無理矢理抑え込むと、王太子の着ているシャツをたくし上げた。

「なんと……!!」

声をあげたのは、今度は白魔法使いの方だった。

王太子の身体には傷口らしい傷口はなく、ただうつすらと赤みを帯びた線が肌に残っているだけだったのだ。シャツの破損部分と範囲が一致することから、かろうじてそれが剣で斬られた痕だとわかる。彼はこれだけの大きな傷が完璧に治癒していることに驚愕していた。

「血を拭き取ったような跡があるのですから、確かに傷口は存在したはず……」

侍医がそう口にする、ハッとしたように室内に残った護衛の一人が進み出た。

殿下のお怪我ですが、リュシオン殿下がお連れになっていた少女が魔法治療を施したのです」

「魔法治療ですと？」

白魔法使いが勢い込んで聞き返す。兵士は真面目な表情でうなずくと、自分が見た治療の様子を語った。

「……なるほど。それなら納得できますな」

「どういふことだ？」

白魔法使いが王太子の身体に手を翳しながらしきりにうなずくので、ニール侯爵は焦れたように問いかける。

「診たところ、傷口だけではなく傷つけられた筋肉や血の管、おそらく神経などもすべて完璧に修復されております」

白魔法使いが説明すると、それまで黙っていた王妃が声高に叫んだ。

「完璧ですって？ ならば何故ユリウスはこんな青白い顔なのです！ 治っているのなら何故目を開けないのです!!」

「王妃陛下！ 落ち着いて下さい」

ニール侯爵が王妃に声をかけるが、彼女は普段の冷めた様子からは想像できないほど激昂しており、彼の言葉など耳に入っていないようだった。

「ああ、ユリウス！ この子は王になるのです。こんなところで死ぬなどあつてはならない。一体誰が……誰がこの子をこんな目に……護衛は何をしていたのです！ 賊は捕まえたのでしょね!」

「陛下、それについては後ほど……」

同席している近衛兵士や侍医、白魔法使いにそのような重大事は聞かせまいと、ニール侯爵は王妃を宥めようとするが、取り乱した彼女にその気遣いがわかるはずもなかった。

「今すぐ、この場で説明なさい!」

高飛車に命じられ、侯爵は諦めたように先ほどの兵士へ説明を促した。

兵士は王妃に深く頭を下げると、そのままの状態で所屬と名前を告げる。

「頭を上げて、知ってることを早く話さない」

侯爵に言われた通り頭を上げた兵士は、鋭く見つめてくる高貴な女性に内心怯みつつ、自分が駆けつけた時の様子を語り出した。

「――駆けつけたときにはすでに殿下は倒れており、その場には賊と思しき少年が、血の付いた剣を持ったまま立っておりました。賊というには不似合いな十代半ばほどの少年です。彼が逃走を図ったため、一緒にいた仲間の兵士が後を追いました」

「それで賊は捕まえたのね？」

否定は許さないとばかりの質問に、説明している兵士と追跡した兵士が青ざめる。その様子で答えがわかったのだろう。王妃は手に持っていた扇を兵士の顔に向けて投げつけた。繊細な絹の扇がバシッときな音を立てて兵士の頬を打つ。王妃は彼の赤くなった頬を気にすることもなく、苛立たしげにまくし立てた。

「たかが賊一人を取り逃がすとは情けない。それで我が国の兵士といえるのかしら……その上、手がかりすら見つけられなかったというの？」

屈辱的な仕打ちにも耐えていた兵士だったが、王妃の最後の言葉にハッと顔を上げた。

「何か、気づいたことでもあるのか？」

ニール侯爵が声をかけると、彼はおずおずと話し出す。

「実はリュシオン殿下が伴われていた少女なのですが、賊と思われる少年を見た瞬間、

『カイン』と叫んだのです」

「なんですって？」

顔色を変えて叫んだ王妃に、その場にいた全員が注目する。

「陛下、その名に何か心当たりが？」

すぐに侯爵が尋ね返すと、王妃はその探るような眼差しから目を逸らして答えた。

「賊に心当たりなどあるわけないでしょう！ そんなことより、名を呼んだのならばその娘……賊の一味ということではないの」

決めつけるような王妃の物言いに、兵士は慌てて口を挟む。

「いえ、それはありません。彼女はマティス卿の娘ですし、何より瀕死の重傷を負っておられた王太子殿下を必死に治療して下さったのですから」

「マティス卿の娘だからなんだというのです。王太子の怪我を治したのも自分が疑われる

ことを恐れてかもしれない。ニール侯爵、その者を早速尋問しなさい」

冷たく言い放った王妃だったが、ニール侯爵は緩やかに首を振った。

「幼い少女のこと、相手も少年となれば、賊とは知らずどこかで偶然に知り合っていたのかもしれない。なんにせよ彼女が王太子殿下を救ってくれたのは事実です。その恩人を徒に尋問するのはいかがなものでしょうか？」

「ですからそれは、自分の身を守るために治療らしいことをしたというだけの話でしょう。だからユリウスは目を覚まさないのよ」

王妃はなおも頑なに言い募ったが、今度は王太子を診察していた侍医と白魔法使いから反論されることになった。

「恐れながら王妃陛下。王太子殿下のお怪我は、傷痕から見ていい加減な治療で回復するような軽いものではございません」

「侍医殿のお言葉は偽りではございませんぞ。王太子殿下が弱つておいでなのは血が足りぬからです。治療魔法をもつてしても失った血は戻りませぬ。ですがもし治療を施していなかったとすれば、今頃は間違いなく殿下のお命はなかつたことでしょう」

二人の真摯な言葉に、これ以上押しても無駄と悟ったのか、王妃は渋々とうなずく。

「その娘がユリウスをきちんと治療したことはわかりました。だが、この子がまだ危険な状態であることには変わりない。それを脱しない限りは娘を完全に信用するわけにはいきません」

彼女是不満も露わにそう言い、反対意見を述べた面々を苛々と睨みつけた。

「陛下、そのことなのですが……」

ニール侯爵が有めるように穏やかな口調で話しかけると、王妃は厳しい表情を崩さぬまま、顎先をすくつて先を促す。

「実は先ほど、件の娘より興味深い話を聞いたのです」

「興味深い話？」

「ええ。クレセニアの古い伝承によると、どんな怪我や病も癒やす秘薬というものがあるらしいのです。それを王太子殿下に差し上げればきつと回復するだろうと」

「なんですって？」

最初は鼻白んだ様子で聞いていた王妃だったが、侯爵の言葉に身を乗り出すようにして尋ねる。

「なんでも、ある場所に存在する『神木の実』というものだそうです」

「そんなものがあるのならば、すぐに手に入れてきなさい」
息子が助かるかもしれないとの希望から、王妃は勢い込んで命じた。

「はい、そのためにも娘に詳しく話を聞く必要があります」

「ふん……ならばわかった。とりあえずその娘と賊の関係については不問としましょう。
侯爵は娘から詳しい話を聞きなさい。……もつとも、その話が嘘ではないとよいが」

「それは大丈夫でしょう。神木の実についてはリュシオン殿下もご存知でした。それにあの娘は身の危険をかえりみず、自分を取りに行くときまで言うてくれました。自衛のための嘘であれば、自らを危険に晒すのは矛盾しております。そう考えれば王太子殿下を救いたいという言葉に嘘はないと思われます」

ニール侯爵が言い切ると、控えていた侍医が思い切ったように口を挟んだ。

「陛下。私共にこれ以上できることはございません。あとは殿下ご自身が回復されるのを待つしかないので。……しかしこのまま目を覚まされなければ、容態は確実に悪化していくでしょう。その秘薬を差し上げられるのであれば、それに越したことはございません」
今最も優先させなければならないのは、王太子の回復であるとわかっているのだろう。身動きもせず眠る王太子を見つめ、王妃は力なくうなずく。

「少し考えたい。わたくしはしばらくこの場を離れます。ニール侯爵、この件については後ほど使いをやりませう」

「かしこまりました」

ニール侯爵が了承すると、王妃はいささか疲れた様子で部屋を出て行ったのだった。

十

王太子が眠る部屋から自室に戻った王妃は、頰れるように刺繍の施された長椅子に座った。背もたれに肘を置き、こめかみを揉みほぐす。するとその時、控えめなノックの音が耳に届いた。

お茶の用意をしていた女官がドアを開けると、そこにいたのは一人の男。

鮮やかな緑の長髪を後ろでまとめ、赤紫の瞳に片眼鏡をかけたジャック・オリバレス子爵だ。

「良いところに来たわ、ジャック」

王妃の言葉で部屋に入ってきたオリバレス子爵は、「王妃陛下にはご機嫌麗しく」と恭

しく一札してみせる。彼女は彼の挨拶に皮肉げな笑みを浮かべると、黙って控えていた女官へ片手を振って退出を命じた。

女官が出て行くのを見送った後、王妃は立ったままのオリバレス子爵に向かって口を開く。

「ユリウスの話は聞いているわね？」

「はい。襲撃に遭ってお怪我を負われたとか」

オリバレス子爵が淡々と答えると、彼女は不快そうに顔を歪めた。

「普段はその落ち着き払った態度を頼もしく思うが、今はただ腹立たしいわ」

「申し訳ございません」

子爵は深く頭を下げるが、王妃の機嫌を損ねたにもかかわらず動揺は微塵も見られなかった。そんな彼の態度に、彼女は「まあいいわ」とつぶやいて話し始める。

「あの子は酷い怪我だったけれど、魔法治療のおかげでなんとか一命は取り留めたの」

「それは重畳」

「本当にそう思っているのならば、もっと嬉しそうにしたらどうなの？」

「申し訳ございません。今は容態も安定していると聞き及んでおりますゆえ、ちようど安堵していたところでございます」

八つ当たりのような王妃の言葉にも、オリバレス子爵は無表情に返答する。

「ええ今は、ね。いつ容態が悪化するかわからないけれど。……それで、よ」

王妃はもったいぶるように言葉を止めた後、彼の目を見つめて告げた。

「ユリウスを襲った者は、カインという名の少年だったということよ」

さすがにこの事実には驚くだろうと思った王妃だったが、目の前の男は「ほう」と一言

つぶやいただけだった。

「わかっているの!? カインは本物の——」

「王妃陛下。そのように興奮されては、女官たちが心配して飛び込んできますよ」

声を荒らげる王妃にオリバレス子爵が言い放つ。穏やかともいえるその声音は、しかし見えない威圧感をもって彼女を遮った。

王妃は冷たい水を浴びせられたように一瞬身を震わせると、やがて幾分冷静さを取り戻したのか大きく息を吐いた。その様子をじっと見つめていたオリバレス子爵は、彼女が



落ち着いたのを見計らって口を開く。

「カインという名が出てきたということは、王太子殿下を害した者は自ら名乗ったと？だとすれば随分間拔けな話ですが」

「いいえ、違うわ。偶然にもリュシオン殿下が連れていた娘と知り合いだったようで、その娘が賊を見て叫んだそうよ」

「ほう……知り合いと。それはまた随分と都合の良い偶然ですね。本当に偶然知っていたただけだと？」

それまで無表情だったオリバレス子爵は、少しだけ興味深そうに返す。

「確かに怪しいわね。でもその娘は陛下の治療のために訪問しているロドリゴ・マティス卿の娘。身分は男爵と低いものの、クレセニア王の覚えの良い人物。あれが匿われている公爵家と面識があったとしても不思議ではないし、ここに来たのは偶然でしょうね」

「なるほど。単なる顔見知りだとすると、下手につけば逆にこちらが不審を抱かれることになりかねませんね」

「そういうことよ。それにあの娘が魔法治療を施してユリウスを救ったと聞いたわ」

「あのように幼い娘が魔法治療……」

オリバレス子爵が繰り返すと、王妃は彼の興味が引けたと思つたのか「ええ」と少しだけ気を良くして答える。そのため、彼が会つたこともないはずの娘を『幼い』と形容したことには気づかなかつた。

「それからニール侯爵が言っていたのだけど、その娘、たちまちどんな病や傷も治してしまふという秘薬の話をしていたらしいの」

「ほう、どんな病や傷もですか……」

今度はありありと興味を示した子爵の様子に、王妃はさらに機嫌を良くしてうなずいた。「なんでもクレセニアに伝わるものらしいわ」

「そうなのですね……しかしそのような秘薬ならば、もつと広く知られていてもおかしくないはずでは？」

考え込むように言つたオリバレス子爵に、王妃は特に気にした様子もなく返す。

「そのような万能薬ゆえに、国外に知られないようにしていたのではないの？ 場合によつては政治的な駆け引きにも使えるわけだし。それに入手するのが非常に困難ということも考えられるわね」

「ああ、なるほど。それはあり得ますね」

「とにかくニール侯爵には、あの娘から詳しい話を聞くように言つてあるわ。もつともあの娘、自分を取りに行つてもいいとか言つたらしいけど、適当なことを言つて逃げるかもしれないし、それほど信用ならないわ」

馬鹿にしたように言つた王妃だったが、次に子爵の口から出た言葉に目を瞠つた。

「おや、それは良い提案ではありませんか」

「何を……」

「娘の提案ですよ。国外の者に隠している話ならば、速やかに詳しい場所を教えて下さると思えませんか。かといつて入手するのに危険を伴うような秘薬を、おいそれと隣国の王太子にと取つてきて下さいと頼めるはずもございません。ですが男爵令嬢ならばそれも可能。幼い娘に行つてもらうのだから、こちらから護衛を付けると言えさほど問題はないでしょう」

オリバレス子爵の言葉に、王妃は考え込むように口元に手をやる。

「そうね、下位貴族ぐらい、途中で何かあつたとしても本人が言い出したことでもあるのだから、さほど問題になるとは思えないわ。それに賊の名前を呼んだことを問い詰めれば、身の潔白を明かすという意味でも断れないわね」

「はい。街道を外れば魔物や盗賊も多いので、旅は恐らく危険を伴うものになるでしょう。となればやはり捨て駒にできる人間を使うのが良いかと」

「ジャック……秘薬などというものの、大げさな嘘かもしれない。だがもし真実であるならば、わたくしはユリウスにそれを使いたい」

静かに言い放つた王妃の顔は、ただ息子を救いたいという母親のもの。オリバレス子爵は彼女の顔を見やり、ただ一言「御意」と告げた。

+

王妃の部屋から退出したオリバレス子爵は、自身が滞在する客室に戻つてきていた。

彼は子爵という下位貴族ではあつたが、王妃の側近という立場ゆえに王城でも上等な部屋が与えられている。

オリバレス子爵は暖炉近くに置かれた長椅子に腰を下ろすと、背もたれに頭を預け、ゆつたりと足を組んだ。

「隣国の王太子に、その連れの幼い娘。——さて、鼠はどちらか」

ククツと笑い声を漏らすと、彼は腹の上で両手を組んで目を閉じた。しばらくそのまま
思いを凝らしていた子爵は、唐突に開いた扉に気づいてゆつくりと目を開く。

「おまえか」

現れた人物に目を向け、オリバレス子爵は冷たく言い放った。

彼の視線の先には、金茶色の髪に柔らかな茶色の瞳をした少年が一人。

エアデルト国王の庶子であり、近いうちに王族として迎えられると言われているヘクト
ル・レオン・ロセットだった。

エアデルト国王が病に伏しているため未だ正式には認められていないものの、すでに王
城では公然たる立場にある彼に対し、子爵の態度はあまりにも横柄なものだ。

しかしヘクトルはそんなオリバレス子爵の態度を咎めることなく、黙って室内に入つて
くると子爵が座る長椅子の横に直立した。

「王太子は一命を取り留めたようだな。……運の良いことに」

ふと零れたオリバレス子爵の言葉に、ヘクトルは何も返さない。そんな彼を気にするこ
となく、子爵はなおも独りごちる。

「まあ瀕死では邪魔にもなるまい。むしろ邪魔になるとすれば、あのわずかな痕跡を辿つ

て入り込んできた鼠の方……」

オリバレス子爵はそこで言葉を切り、考え込むように口元に手をやった。

「どちらが鼠にせよ、今の状況では隣国の王太子に手を出すのは少々厄介か。ならばさ
しあたって小娘の方から排除するのが良策というもの」

彼はフツと口元を緩めると、傍に立ったままのヘクトルを仰ぎ見た。

「都合良くあの娘はここを離れることになっている。それに合わせて罫を張る。いいな？」
「御意」と短く返すヘクトルに、オリバレス子爵は軽く手首を振ってみせる。

まるで野良犬を追い払うかのような仕草だったが、ヘクトルはただコクンとうなずくだ
けだ。

そのまま黙って部屋を出て行く彼の表情は、やはりどこか人形のように無機質で冷たい。
残されたオリバレス子爵は、長椅子から立ち上がるとコンソールテーブルに近づき、そ
こに用意された葡萄酒をグラスに注ぐ。一気にグラスを傾けた彼は、赤い液体でうつすら
と唇を濡らしたまま、虚空に向けてつぶやいた。

「さて、次の準備を調えねばな……」